

モーリアックとルイ

—— 作中人物の起源をめぐって ——

内山 憲一

1933年に出版された『小説家と作中人物』はモーリアックの二つの講演のテキストをまとめたものであるが、声帯の手術を受けたばかりの小説家にかわって代理人によって前年の3月に読み上げられた同名の第一のテキストは、特に小説の登場人物の生成についての実作者による考察であり、文学創造の秘密に関する簡略ながら重要なエッセイになっている。『テレーズ・デスケールー』（27年）には主人公造形にあたって一つのヒントとなった体験があったこと、『愛の砂漠』（25年）生成過程において作者が予定していなかった展開が生じたことなど、主要作品に関する興味深い言及を含むこのテキストを書くにあたって、31年の2月から秋にかけて執筆されたばかりの『蝮のからみあい』創作時⁽¹⁾の思い出がモーリアックの胸中で大きな部分を占めていたことは疑いない。そこで、妻のイザに宛てた手紙という体裁で始まるこの物語の語り手であり主人公であるルイという人物像が形成されるにあたって、どのような要素が作者の実生活の中にあっただのかを、『小説家と作中人物』を手始めに見ていきたいと思う。

ルイの性格を規定するにあたってのヒントになる個人的な体験の一つは、誰もが日常的に覚える小さな感情にすぎないようである。仕事に疲れ果てて、その内容で頭がいっぱいのままに夕食の卓に向かう一家の長である一人の作家を想像してみようとモーリアックは言う⁽²⁾。はしゃぎ騒ぐ子供たちの前で、作家は目下自分の心を占めている仕事のことを話せないことにいら立ちを覚え、ないがしろにされているように感じる。小説中の次のような箇所が確かにこれに対応している。

子供とだったら、どんな小さな子供とだって、おまえは一日中ぺちゃくちゃとばかなことをしゃべっている。それなのにあの食事といったら。ぼんやりした頭で、仕事に疲れ、誰にも話しようのない心配ごとで打ちひしがれ、私は食卓を離れたものだ (p.387) ⁽³⁾。

もちろん、このような自己の小さな感情の起伏は、ルイという人物像を形成する数多くの要素のほんの一つにすぎない。作中人物は重要な人物であればあるほど、多くの要素が複雑に絡みあって形成されていく。また、強力なレンズに譬えて説明しているあの技術、些細な要素を「変形し拡大する恐るべき力」⁽⁴⁾を説明するために、モーリアックはそもそもエッセイの中で作家の食事の場面を例として挙げているわけである。

それではこのような小さな要素ではなく、モデルと言えるほどの人物が実際にいたのだろうか。1951年にアルテーム・ファイヤール版全集に寄せた序文において、モーリアックは『ジェニトリクス』(23年)を執筆した際と同一のモデルがいて、ルイはその人物の「美化された」肖像だという注目すべき発言をしている⁽⁵⁾。『ジェニトリクス』とはヴェルギリウスの『アエネーイス』において、事あるごとに自分の血をひくトロイアの勇将の助けに馳せ参じるヴィーナスに付与された名前であるが、ここで問題になっているのは、やはり長じても過保護で独占欲の強い母親の影響下にいるフェルナン・カズナーヴのことである。一方『小説家と作中人物』においては、「決してそう望んだわけではないのだが、『嫂のからみあい』の主人公は何から何まで『ジェニトリクス』の主人公を思い起こさせることに私は気づいた」とモーリアックは述べている⁽⁶⁾。「望んだわけではない」というのは序文の発言と矛盾することになるが、無意識の内にモデルとした人物がいたことに後になって気がついたのか、あるいは韜晦によるのか。

同一のモデルがいたとしても、プレイヤー版の注においてジャック・ブテイが指摘しているように、素材を変容させる作家の夢想の力が強力に働いていることは間違いない。妻帯した息子を独占しようとする母親に監視され手なずけられている子供のような五十男であるフェルナンと、三十歳にしてすでに著名な法廷弁護士であった明敏な男ルイとの間には、ほとんど共通点はないからである。エゴイズムと吝嗇と形容すべき性格は共通といえるだろうが、フェル

ナンにはルイにおいて顕著な権力への志向といった野心が欠如している。性格というよりも、性格が引き起こした状況によって幸福になる術を知らない「愛されぬ男」である点も一致してはいるが、これはすべての「モーリアック的な」作中人物にあてはまることである。フェルナンは母性愛の名のもとに装われた母のエゴイズムに圧倒されている。『蝮のからみあい』においては、特に成年期以降のルイの母のイメージはそれに比べると希薄で、静かに消え入るように亡くなっていくその姿がかえって印象的である。

ルイという人物の最も表層的な部分や彼の生きたドラマの外面的な筋書がある思い出に結びついていることを認めたくて、「実在した状況やある癖、ある性格を私は借用しはしたが、それを別の魂のまわりに結集させたのである」とモーリアックは述べている⁽⁷⁾。フェルナンとルイが実在の同一人物をヒントに生まれたとしても、作家にとって重要なことは、その実在の人物が触発した夢想を深めていくこと、夢見られた作中人物の心のより深い層へと降りていくことなのである。

*

作家が素材を「変形し拡大する恐るべき力」を考慮に入れ、さらにモデルの問題を考えてみることにしたい。ルイの性格のアウトラインが「ある鮮明な思い出」に結びついているとしても、その出発点は別にして、彼は実在した人物と異なっているばかりか正反対でさえあるとするモーリアックの言葉⁽⁸⁾をどう受け止めるべきか。この強調ぶりには、作家がこれを書き留めた時に思い描いていた人物に対する何か配慮のようなものが感じられる。例えばそれが彼の義父のことだとしたらどうだろうか。

義父 マルク・ラフォン

1912年夏に知り合い、翌年27歳の時に結婚したジャンヌの父親についての言及はモーリアックの自伝的文章の中で意外に少ないが、それはまずこの「ジロンド県財務長官、財務監察官、理工科学校出身者、元アルジェリア銀行総裁、元フランス銀行理事」という華々しい肩書を持っていた公人に対する個

人的なコメントを憤む配慮から来ていることは容易に想像できる。この長い肩書が記されている『続内面の記録』（65年）の後記の中で、作家は「恐ろしい」（terrible）という言葉で義父を形容しているが⁽⁹⁾、文脈によって肯定的意味に取ることも可能なこの言葉の重みは、自筆原稿からは削除された「ただ不幸せであるがゆえに意地悪だった」という表現によって測ることができる。まさにルイを彷彿させるコメントである。それに続く箇所でもーリアックは実際に次のように記している。「彼が私たちにどんなにひどいことをしたにせよ、私が『ジェニトリクス』と『蝮のからみあい』を書くことができたのはこの義父のおかげである。彼と知り合わなかったならば、ある種の素材を考へつくことはできなかつただろう。」

この畏敬すべき男の娘に結婚を申し込むなどという暴挙をしでかした駆け出しの文学青年を、ラフォンが何と財務長官室に、おそらくルイが同じ地位にあったならばそうしたように「出頭」させた場面、第三者の目から見た時にのみユーモラスなエピソードがジャン・ラクチュールによる精細な伝記に描かれている⁽¹⁰⁾。あらかじめ長官の拒否の意向は知っていた青年がやってくるのを、事情を知っている職員たちが遠くからうかがっている。「ムッシュー、例の件についてはノンです」が長官の第一声で、それについての理由も与えずに、「さあ、お話ししましょう」と続く。「何についてでしょうか」とやっとの思いでおずおずと答える茫然自失の青年に今度は、「文学についてだよ！」と来る。この強大な権力を持つ自信満々の男にとっては、二年半前に処女詩集『合掌』が文壇の大御所モーリス・バレスの絶賛を受けていた新進文学者も取るに足りない存在だった。からかうのが楽しくてたまらぬように長官はこう続ける。

— いったいどんなものだね、君、詩人ってのは。

— ものを書いたり、本を出したりする人です。

— 君がアカデミー会員にでもなるのならねえ……

半ばやけにでもなったのか、反発心が機知を取り戻したのか、「一世代に会員は四十名もいるんですよ、ムッシュー」と詩人はやり返す。つまり『続内面の記録』によると、「一世代につき四十名も見つけなければならぬのだから、その栄誉を私が逃すなどとは想像もできません」⁽¹¹⁾と答えて、モーリアック青年はこの「恐ろしい男」から微笑みを引き出すのに成功する。ともあれ、何かと難癖をつけたがるラフォンも強硬な態度を取る妻の前についに折れ、翌

1913年にジャンヌとの結婚式はとり行われる。戯れに発したアカデミー入りの予言もその20年後には成就してしまうのだが、ラフォンはそれを知ることなく1919年に病没している。

ルイの性格のおそらく表層的な部分の多くは、このように強い個性を持った義父から来ていることが推定できるが、主人公の魂のドラマの意味を理解するためには、作家の幼少時の精神形成上に影響を与えたであろう人々——「不在の」父を含めたモーリアック一族の人々に目を移さなければならない。

叔父 ルイ・モーリアック

一族の中には昔から「年を取った独身の男」という系列があったという。第三共和政時代の始めに亡くなったというから、1885年生まれのパウワ・モーリアックが直接知るよしはないが、一族の「伝説」に忘れたい逸話を残した「ラペール伯父」がこの系列に入っている。父方の祖母の兄弟だったというこの独身者は、ある「いかがわしい女」のために遺言状を書き換えようとしてポルドーに出たその夜に、その女の腕の中で「家の守護神に打たれて」亡くなった⁽¹²⁾。この逸話は自分を憎む家族の者への復讐として、かつての愛人の息子に全財産を譲渡しようとするルイの狂奔を連想させるが、たとえその話が小説における復讐計画の枠組みのヒントになったとしても、それは作品の表層部分の一片にすぎない。ここで問題にしたいのは、この「独身男」の系列の直系で小説の主人公と同じ名前を持つ叔父、つまり将来の作家の生後二十ヶ月目に亡くなった父ジャン＝ポールの二歳年下の弟のことである。

フランソワとその姉と三人の兄たちの後見人であり司法官であったこのルイ叔父の肖像は、作家の自伝的色彩の濃い『フロントナック家の神秘』（33年）の中で愛情を込めて描かれている。作品中、若くして寡婦となり五人の子供を育てるために身を捧げるブランシュ・フロントナックを献身的に助ける義弟グザヴィエ・フロントナックと同様に、このルイ叔父もまた父のいない甥たちの財産の管理のために二週間に一度は顔を見せていたという⁽¹³⁾。彼はしかし本質的な一点においてフランソワたちの母クレールに盾突いていた。つまり「無宗教で (irréligieux) 不可知論者で (agnostique) おそらくは無神論者 (athée)」だった。irréligieux と athée を区別していることには注意しなければならない。

irréligieux であって掟は実践していなくても、あるいは制度としての宗教に反発してさえ、athée ではないことは充分にありうる。また「おそらく」無神論者というのは、後に見るフランソワの父や祖父と同じく、そのことを一度もはきっぱりとは口に出したことはないと言われていたからである。ともかく彼は教会には足を踏み入れなかった。日曜日に甥たちがミサから帰って来てもまだ寝床に入っていたりする点、聖職者の姿を見るとさっさと逃げ出してしまおう点は『蝮のからみあい』の主人公と同様である。ある年の八月十五日の聖母被昇天祭に、義理の姉クレールが歌う予定の大ミサにこの叔父も出席することになっていたが、彼は結局それに踏み切ることができなかった。このエピソードもそのまま小説中ルイの上に置き換えられている (pp.433-434)。

信仰篤いモーリアックの母はそんな義弟が子供たちに与える悪影響を心配していた。けれども彼女の心配は見当違いだった。「ルイ叔父は、ちょうど番犬が狩りに行かないように、ミサに行かなかったのである。」このように、叔父の行動は是認するとか非難するとかの対象ではなく、ただ彼は母とは違った人種に属していたのだと小説家は述べている。すでに母親を失っていた叔父は彼にとっては「真実の生のらち外にいる老いた孤児 —— 二重の意味での孤児」のように見えた。まず、信じてはいない神との関係における孤児であり、さらに独身であるということで「一族の掟であった母系制度 *matriarcat*」にそむいていたからである。父の死後かなり長い間、母方の祖母の家に身を寄せていた一家に育ち、身近に支配力を行使する男性を知らなかったモーリアック少年にとって、一族はまさに母系的なものであった。「女性は妻という資格であっても、夫にとってさえ母となっていた」とする小説家の言葉は『蝮のからみあい』におけるルイの回心の導き手としての妻イザの役割 —— 小説家モーリアックが作中人物としての彼女に付与した役割 —— の重要性を考えるにあたって有用である。

ルイ叔父は1925年に没している。彼が生きていれば、7年後に刊行の小説の主人公のために作家が他の名前を選んだだろうことは言うまでもない。

祖父 ジャック・モーリアック

敬虔な母方の家系と違って、モーリアックの父方の家系にはルイ叔父がその

一例である反教権的な気風があり、ルイとジャン＝ポールの父ジャックもまた年季の入った教会嫌いとして通っていた。ただ彼がモーリアック一族の「伝説」において不朽の位置を占めるのは、日頃の言動と正反対であったその最期の様子によって。それは1890年のことであるが、幼いフランソワの心性の形成において、繰り返し聞かされたその逸話によって「事件」は大きな刻印を残すことになる⁽¹⁴⁾。

ポルドー郊外のランゴンに住んでいたジャック・モーリアックはランド地方に千ヘクタールほどの松林、カレーズという名のもとに『蝮のからみあい』の舞台となっているマラガールにはぶどう園を所有していた。土地に強い愛着を持っていたこの祖父は特に『運命』（28年）の登場人物ゴルナック老人のモデルになったとされている。復活祭の前々日、イエスの受難を記念し肉食を絶つ聖金曜日に、カトリックの形式主義に対する反発として好んで骨付き背肉（コートレット）を食べたというジャックの挑発的態度は小説のひとつまとなっている。

私はどうあってもこの贖罪の日には例のコートレットを食べたいのだが、それはなにも空威張りのためではない。私の意志は損なわれてはいないし、これからも、いかなる点においても譲るつもりはないことを、お前たちに思い知らせるためなのだ（p.407）。

一人一人と対する時よりも、一族みんなの前の方がより自分の力を感じるとする逆説的な言動にはルイの孤独感が露呈しているが、次のような科白には祖父ジャックの快活な口吻が感じられる。「お前が牛肉の煮込みではなくて紅鯔を食べているのを見て、永遠なるお方がいったいどんな喜びを得られるというのかね」（p.431）。義父が得意とするこのような揶揄が飛び出すと、モーリアックの母は「子供たちのために」口を慎むように催促したという。

さて、そんなジャックの奇跡的な最期の話である。「その死の前々日の、最後となった祖父の訪問のことを思い出す（私は五歳だった）」と、作家は後に『ある人生の始まり』（1932年）に組み込まれることになるテキスト『はるかなるわが思い出』（29年）の中に書き記している。しかしモーリアックは本当に「思い出して」いるのだろうか。晩年の『続内面の記録』において、

「そのことを私は覚えているのだろうか」と彼は自問している。自分でそれを思い出しているのか、人から聞かされたことなのか、もはや識別のつかないのはか昔の幼少時の「思い出」の群れの中で、その出来事はしかし確かな実在感を帯びて老作家の心の中に刻み込まれている。

ボルドー市内の義理の娘の家を訪れたジャックは、ひじ掛け椅子に深々と腰をおろしていた。三年前に先立たれた息子のジャン＝ポールをはじめとする何枚かの写真をつくづく眺めている。「なんてえ墓場だ！生きてるのはわしだけか……」中にあった自分の写真を指さしてため息をつき、祖父はこうに言ったという。当日は自分にゆかりのある様々な場所を見に行ったあと、夕食後いつものように友人たちの所へトランプをしに行く。「超自然的なもの (le surnaturel)」、子供たちにその話を数え切れぬほど語ったであろう母や祖母によると当然「恩寵」というべきもの⁽¹⁵⁾が介入するのはそれからである。なじみの婦人から一緒に教会に行かないかと誘われたジャックが — 義理の娘の影響でその態度を以前より和らげてはいたが、それでも生涯を通して公然と反教権主義を貫き、教会には長年足を踏み入れたこともなかった彼が — それに応じて皆を驚かせるのである。教会からの帰りに路上で倒れ、家のベッドまで運ばれた彼は息を引き取る前に何と「信仰が私たちを救う」と言って合掌までしたという。

この出来事が語り継がれる過程で潤色されていったかどうかはあまり問題ではない。おそらく教化的配慮による多少の潤色はあっただろうが、そのような要素も含めて「伝説」となったものがそのまま、幼いモーリアックの心に浸透したはずである。重要なのは作家の心性におけるこの逸話の現前であり、創作活動に及ぼしたその影響である。祖父の最後の言葉は後に初期作品の『肉と血』(20年)の中に挿入され、死に際の様子は『ジェントリクス』において、倒れた道端にある家に住む人の名前にいたるまで、そっくりフェルナン・カズナーヴの父の上に転用されることになる⁽¹⁶⁾。また、何十年にも亙って孤独に苦しみ復讐心にさいなまされる男が突如執着から解放され心の平安を見出す回心譚である『蝮のからみあい』の大枠には明らかに、祖父の奇跡的な「回心」譚が示唆する「救い」というものの不可解さ、その予断不可能性という観念が看取できるのである。

父 ジャン＝ポール・モーリアック

「かわいそうなパパ」のために、たくさん祈らなければならないことをお前は彼らに隠してはいなかった。何をしたところで、とにかく私は彼らの世界においては私なりの地位を占めていたのである。つまり、たくさんお祈りをして、回心させるようにしむけなければならない「かわいそうなパパ」というところだった (p.432)。

小説の語り手ルイは手記の中で、このように妻があらかじめ子供たちの心の中に自分に対する偏見を植えつけてしまったことを非難しているが、宗教に関して自分が口にすることが、子供たちが自分に対して抱いているイメージを裏づけ強めてしまうこともまた認めている。ところでこの「かわいそうなパパ」という言い回しは、モーリアック少年が亡き父について話題になる時にいつも耳にしたものであるという。例えば『ある人生の始まり』の冒頭近くには次のような文がある。

私は父のことは覚えていない。けれども父の痕跡がまだ真新しくあった頃のこと覚えている。母が寝室のたんずを開けると、一番上の棚に黒い山高帽が、「かわいそうなパパの帽子」が見えたものだった。

祖父のジャックよりも三年早く、未来の作家がちょうど二十ヵ月目に、父のジャン＝ポールは脳腫瘍で亡くなっている。なぜ「かわいそうな」父だったのか。やはりジャックや弟のルイと同様に彼もまた無信仰で、少年の母にとってはその魂の救いのために祈りを欠かしてはならない存在であったからである。しかしその臨終の時の様をめぐって、ジャックのそれと同類の、一つの興味深い逸話が残されている⁽¹⁷⁾。最期の時にジャン＝ポールは自らの手で、キリスト像のついた小さな十字架を唇に近づけようとしたという。もっともそれはモーリアック少年の母の言い分で、反教権主義者ジャックのコメントはまたふっている——「あれは唇のあたりを搔くためだった。」祖父のユーモアにもかかわらず、また事の真偽にかかわらず、この逸話が祖父の死にまつわる「伝説」とあいまって少年に与えた影響は大きい。どのような人であっても——

たとえ無信仰に見える人であっても——「恩寵」を受け入れる通路は閉ざされてはいないのだという信念が、ルイや『黒い天使たち』（36年）におけるグラデルのような登場人物造形の出発点にあったことは明らかである。

お父さん！会ったことはないが、心から愛しているお父さん。今でも覚えているけれど、十歳か十二歳の頃のある夕暮れ、学校からの帰り道、あなたは死んではいないという考えが浮かび、ぼくを捕らえてしまったことがある。どんな話をでっちあげたのかも覚えてはいないけれど、あなたが長い旅から戻って来ていて、家に帰ればまた会えるのだと思い込んでしまった。ぼくは気が狂ったように走って歩行者を突き飛ばした。今昇ってきたばかりのこの同じ階段を、ぼくは大急ぎで駆け上がったのだ。中国製のランプの下で、母さんはロランに公教要理を唱えさせていた。彼女の前にあるかわいそうなパパのひじ掛け椅子には誰も座っていなかった⁽¹⁸⁾。

これは自伝的小説と言われる最晩年69年の『ありし日の一青年』の中の一節であるが、同様のエピソードはすでに『蝮のからみあい』（p.393）の中においても語り手ルイの思い出として喚起されている。おそらく作者自身の思い出が下敷きとなっているこのような挿話は、常に不在だった父が「(彼を)知ることのなかった不幸に決して慣れることのなかった」少年⁽¹⁹⁾、女性が君臨する環境に育った少年の夢想において大きな位置を占めていたことを示している。様々な思い出話をつなぎあわせて作りあげていたその父親像はどのようなものだったのか。「非常に繊細で内気であり、書物が好きで、やむを得ず従っている商売は嫌いな人」であったと作家は述べている⁽²⁰⁾。学校では優秀な成績で賞を一人占めにしていたほどであったが、長男であったがゆえにバカロレアを取る前に父親のジャックの命令により退学し、オーストラリアから輸入する樽板材の取引に従事することになる。けれども1870年の普仏戦争時に事業は解体し、その後しばらくは資格も仕事もない状態に置かれる。死亡する前は証券取引に従事していたという。

この繊細で大好きの父の肖像は作家モーリアックにとって非常に好ましいものであった。作家の没後1973年に発見されたジャン＝ポールの日記の断片は、フランソワ・モーリアックの長男、やはり作家となったクロードが翌年に

刊行する『動かない時』⁽²¹⁾の中の所々に挿入されていて、息子フランソワが父に対して抱いていたイメージがおおむね正しかったことを立証している。ジャン＝ポールはその自由思想家的気風に支えられた確固たる審美眼を備えていたようで、普通の愛書家のようにモンテーニュやラ・ブリュイエールの豪華版を購入していただけではなく、その蔵書の中にボードレールまで残したという。将来の作家が十五歳の時に発見することになるこの詩人は、ラクチュールが言うように、父から子への「最も貴重な遺贈物」であり「二人の間の最も堅固な絆」⁽²²⁾とでも言うべきものとなった。読書への情熱だけではなく、ものを書く才能もこの詩句を作ることをたしなんだという父親から受け継いでいることを自覚する作家は、自伝的な『フロントナック家の神秘』の所々で、自己の分身である五人兄弟の末っ子イヴの詩才が不在の父ミッシェルに由来するものであることを暗示している。

まったく異なった条件のもとで文字通り一から、つまり誕生から人生を始めることができるならどうだろうか。もし物心つく前に失ったのが「不可知論者であり、おそらくは無神論者の」父ではなくて、煩瑣なまでに宗教心篤い母の方だったら自分はどうなっていただろうか——これは作家が反芻した問いであり、夢である。信心深い母によってカトリックの教えのもとに涵養されたが、「形式に固執し（formaliste）、つまらぬことにこだわっている（vétilleuse）」ように見えるその信仰のありかたは早くから理性に衝突することもあったと晩年の作家は『私の信条』（1962年）の中で告白している⁽²³⁾。敬愛する母の信仰をこのように言い表すことも避けないモーリアックの内には「不在の」父ジャン＝ポールが常に現前していた。

『蝮のからみあい』はある意味においては、その形なき現前に形を与える試みであったと言える。断片的に記されている小説内の年譜によると、ルイとイザの結婚は1885年、つまり作者モーリアック誕生の年である。とするとルイの子供たちは作者とほぼ同年齢ということになる。ドレフュス事件など宗教に関する問題をめぐって顕在化した両親の不和を目の当りにして育ったルイの子供たちの少年時代は、もしジャン＝ポールが存命でその自由思想が母の篤い信仰と衝突していたならば生きてであろう、作家の虚構の少年時代でもある。

*

外在化された「衝突」は起こらなかった。モーリアックの幼少年時代に深く浸透し、四方八方からそれを取り囲んでいたのはカトリシムである。毎晩九時に欠かすことのない一家そろってのお祈りからカトリック暦が規定する様々のお祭りに至るまでの形式に則った勤め、内面においては「目には見えないけれどもそこにて、私たちを見ているあるお方」と語り合う習慣に律せられた生活。「私は甘美であると同時に恐るべき世界のさなかに生きていた」と作家は述懐している⁽²⁴⁾。ひ弱で内気な子供として学校生活にはうまく適応できなかったが、『ある人生の始まり』が明示するように、絶対の信頼を置く母親のもとで、家庭内においてはこの上なく幸福だった幼年時代をモーリアックは過ごした。けれどもそのような幼少期を経て、形式的な教条主義に対する批判精神が芽生えるのも早くからのことである。「本性に従うならば、私のような精神の持ち主が、教えられた宗教に嫌悪を抱く可能性は充分過ぎるほどあったのである。」『私の信条』において先ほど見た、母の信仰の形式主義的傾向に言及するくだりを作家はこのように続けている。

しかし『私の信条』はその前書きに見られるように、「自分がその中で生まれ育った宗教に、あなたはなぜ忠実なままなのですか」という問いに対する回答として書かれたものであった。モーリアックが信仰を失わなかったのは、出発の時から押しつけられた教育の目指したものに反してのことであり、その教育にもかかわらず失わなかったと言うのが正しい。教養とは何たるかを知らず、その担い手にいかなる敬意も持たない俗人たち、さらには永遠の生命でさえ儲けの対象であるかのように低俗な計算に終止するパリサイ人、そのような人たちに対して覚えた反発に打ち勝ったのは彼の内にあった「あるひそかな力」である。それは何か。『続内面の記録』において、モーリアックは実に回りくどい言い方でそれを表そうとするのだが、彼の立場を考えるならば伝えようとするところは明白である。それは「まだそこにあり、まさにこの瞬間にも現れているあの存在」、別な言い方をすれば、受け取らずともすべてを与えてくれる「ある愛の姿」である⁽²⁵⁾。

この「存在」に対する者がパリサイ人の精神を持つ信者である以上は、作家の父や祖父のような「無信仰者」はその対立項ではありえない。また忘れては

ならないことは、反感を覚えさせる人々の資質をモーリアック自身が自らの内に自覚していたことである。教会の外に身を置くシモーヌ・ヴェーユのような人物の聖性は作家に「(彼)自身の生涯の汚点となっている癒しがたい享楽主義」⁽²⁶⁾を映し出してくれる。ヴェーユのような「聖人」とはもちろん同列に並べることはできないが、陳腐な比喻を使うと「囲いの外に出てしまった迷える羊」であつたらう父や祖父などの現前は、自己欺瞞によって硬直化した信仰に陥らないためにモーリアックが保持しなくてはならなかった自覚——パリサイ人を憎んでいる自分も実は彼らの息子であり、彼らの一員でないとは言えないという二重の心性の自覚——を支えたのではないだろうか。

さて、「作中人物はどこからやってくるのか」という最初の問いに戻らなければならない。作家は「人生が彼の中に蓄積した映像や思い出の、あの広大な貯え」⁽²⁷⁾の中から作中人物を形作る諸々の要素を汲み出していく。それはあるいは自分の家族、身内を含めて、今までに出会った人の容貌や性格の中の突出した部分、目につく癖や習慣であるかもしれない。けれども登場人物の魂のドラマのタペストリーを織りあげる時には、たとえ現れ出て来る人物像が作者に似ていないように見える場合でも、「その縫い糸は彼の存在の内奥から引き出されてくるのである。」⁽²⁸⁾もちろん作家の「存在の内奥」には、彼が一人の人間として誕生以来積み重ねてきたものだけではなく、その生に繋がる過去に生きた人々の生もまた凝縮されているはずである。

註

モーリアックの著作は以下のガリマール社、プレイヤード版を参照した。

Œuvres romanesques et théâtrales complètes, édition établie par Jacques Petit, 4 vol., 1978-1985.

Œuvres autobiographiques, édition établie par François Durand, 1990.

以下それぞれ OR., OA. と略記する。

- (1) Voir OR.II, p.1160 (Notice), p.1168 (Note sur le texte).
- (2) *Le Romancier et ses personnages*, OR.II, p.846.
- (3) 『蝮のからみあい』のページ数は以下すべて上記プレイヤード版 OR.II に対応する。
- (4) *Le Romancier et ses personnages*, p.845.
- (5) Préface reprise dans OR.II, p.884.
- (6) *Le Romancier et ses personnages*, p.853.
- (7) *Ibid.*, p.845.
- (8) *Ibid.*, pp.844-845.
- (9) *Nouveaux mémoires intérieurs*, OA., p.814.
- (10) Jean Lacouture, *François Mauriac, 1. Le sondeur d'abîmes 1885-1933*, Seuil, coll.Points, 1990, p.168.
- (11) *Nouveaux mémoires intérieurs*, pp.813-814.
- (12) *Ibid.*, p.729.
- (13) 叔父のルイについては主に以下のものを参照。
Nouveaux mémoires intérieurs, pp.728-729.
- (14) 祖父のジャックについては主に以下のものを参照。
Commencements d'une vie, OA., pp.72-73.
Nouveaux mémoires intérieurs, pp.677-678.
Le Nouveau Bloc-notes, 1965-1967, Flammarion, 1970, p.271.
- (15) le surnaturel の語義には la grâce が含まれている。「恩寵」を表す場合には後者を用いるのが普通であるから、モーリアックの母や祖母も当然この言

葉を用いたと思われるが、作家は解釈の幅が広がる前者を用いている。

(16) *La Chair et le sang*, OR.I, p.323. *Genitrix*, *Ibid.*, p.626.

(17) *Nouveaux mémoires intérieurs*, p.678.

(18) *Un adolescent d'autrefois*, OR.IV, pp.725-726.

自伝の *Commencements d'une vie* (p.70) において確認できるように、「中国製のランプ」は母の思い出に密接に結びついている。この引用文が作者の実際の思い出を書き写したものではないかと推定する根拠の一つである。

(19) *Commencements d'une vie*, p.69.

(20) *Nouveaux mémoires intérieurs*, p.727.

(21) Claude Mauriac, *Le Temps immobile, 1*, Grasset, 1974.

(22) Lacouture, *op.cit.*, p.28.

(23) *Ce que je crois*, OA., p.604.

(24) *Mémoires intérieurs*, OA., p.555.

(25) *Nouveaux mémoires intérieurs*, p.787.

(26) *Ibid.*, p.788.

(27) *Le Romancier et ses personnages*, p.841.

(28) *Mémoires intérieurs*, pp.523-524.